

数研 AGORA

▶ 現行課程移行後の大学入学共通テストを振り返る / 矢部 正明……1
▶ 予備校講師が見る共通テスト地理「身近な地域調査」 / 中土居 宏樹……4

▶ 世界と日本のおもなできごと (2025. 9～2026. 6) / 数研出版編集部……6

No.86

この用紙は、再生紙を使用しています。

現行課程移行後の大学入学共通テストを振り返る —世界史教員による「歴史総合」「世界史探究」の分析と指導例

関西大学中等部・高等部
矢部 正明

1. はじめに

大学入学共通テスト(以下、共通テストと略する)が2021年度より実施され、2025年度実施分より試験形式や科目設定が大幅に変更された。新科目の「歴史総合」は単独受験させる方式をとらず、「日本史探究」「世界史探究」との組み合わせ、あるいは「地理総合」「公共」という新科目との組み合わせによる受験方式となった。

本稿では、地歴科目の受験動向の分析および出題内容についての分析、さらには世界史教員として長年指導してきた筆者が「歴史総合」と「世界史探究」の授業を担当し、独自に分析した内容を元にどのように生徒たちに共通テストの対策指導をしてきたのかについて言及していく。

筆者は本誌 No.82(2024年11月発行)において「『歴史総合』の授業はどのように取り組まれてきたのか」と題して寄稿した。それには、筆者が共通テストの受験者を念頭において展開している授業と、教科指導の途上について述べた。

本稿は、共通テストで測られる学力に対し、筆者の授業での指導が果たしてそれに沿ったものになっているか、という自問への「答え合わせ」つまり、振り返りと改良してきたことを述べるものである。

2. 共通テストにおける地歴科目の受験動向の分析

大学入試センター試験(以下、センター試験と略する)から共通テストに移行するときに、世界史を主に教えている教員から、「現行課程になって世界史科目が必修から外れるので、高等学校等で「世界史探

究」の選択者が激減するのではないか、そしてセンター試験のときより漸減していた世界史科目の受験者数も激減するのではないか。」という危惧の声が多く上がった。しかし、これは杞憂だったようで、「世界史探究」の教科書採択数は、世界史Bの教科書採択数と比べても大きく減ってはいない。そして、現行課程の科目での試験が始まった2025年度から2026年度の「歴史総合、世界史探究」の共通テスト受験者数はむしろ増加している。

一方で、「地理総合、地理探究」は地歴科目のなかで一番多くの受験者を集めた。地理科目の受験生の増加は、現行課程になって「地理総合」が必修化し、「総合」と「探究」がシームレスに学びやすく文系・理系問わず受験生を集めたこと、さらには自然地理分野や統計の処理を含む内容から、特に理系の受験生にとって親和性が高いことが要因であると考えられる。

二番目に受験者が多い「歴史総合、日本史探究」も増加傾向にあり、「歴史総合」との組み合わせの歴史科目は、文系の受験生を中心に選択されたことが推察される(表1参照)。

表1 現行課程完全移行後の共通テスト地歴科目受験者数

科目名/年度	2025年度(人)	2026年度(人)
地理総合、地理探究	125,622	143,237
歴史総合、日本史探究	114,599	124,431
歴史総合、世界史探究	69,273	78,710

大学入試センター HP 各年の「大学入学共通テストの実施結果の概要」より

そのなかで、激減すると危惧されていたにもかかわらず「歴史総合、世界史探究」が受験者数を伸ばしている理由についても考察してみたい。

必修科目の「歴史総合」の現行教科書12冊を見ると、世界史を中心とした内容と日本史を中心とした内容が7：3ないしは6：4の比率で構成されていることがわかる。また、日本の歴史事象を世界から俯瞰させたり、世界と日本の比較や関係性について考察させたりする内容が多く見られる。すなわち、細かな個別の事象を追うのではなく、日本を含む世界の歴史を大掴みさせる科目設計になっているのである。さらには、それまでに学んだ近現代の歴史を踏まえ、現代的諸課題を考察する活動においては、おのずと世界に視野を広げることになる。つまり、「歴史総合」を学んだことで世界の歴史に興味を持ち、探究科目においても「世界史探究」を選択し、大学受験においても世界史を選択する高校生が増えたのではないかと推察している。

3. 共通テストの地歴科目の平均点から見る分析

表2 共通テスト地歴科目の平均点と標準偏差

科目名／年度	平均点		標準偏差	
	2025年度	2026年度	2025年度	2026年度
地理総合、地理探究	57.48	61.87	15.85	16.14
歴史総合、日本史探究	56.99	62.29	15.76	17.47
歴史総合、世界史探究	66.12	60.88	17.61	18.04

大学入試センター HP 各年の「大学入学共通テストの実施結果の概要」より

上の表2は地歴科目の平均点の過年度比較である。これによると、2025年度の「歴史総合、世界史探究」の平均点は他の2科目に比べて突出して高かった。特に「歴史総合、日本史探究」とは約9点も差がついた。その理由として、「歴史総合」部分の出題が世界史的知識を前提としたものが多く、日本史を主体に学習を進めてきた受験生が苦戦し、一方で世界史を主体に学習を進めてきた受験生は有利に働いたということが、予備校やマスコミの分析に多く見られた。さらに「世界史探究」が概ね標準的な難易度の出題、「日本史探究」がやや難易度の高い出題になっていたことも指摘された。

2026年度は、「地理総合、地理探究」の平均点が前年度より4点以上アップ、「歴史総合、日本史探究」が5点以上アップ、一方で「歴史総合、世界史探究」は5点以上平均点が下がった。このことにより、地歴科の3科目の平均点はほぼ60点を上回る程度で、各科目の差は2点以内に収まり、平準化されたといえよう。

4. 得点分布から見た地歴科目分析

前述の通り、2026年度の共通テストでは「歴史総合、世界史探究」の平均点は、2025年度から5点以上下がり、他の地歴科目と比べ一番低くなったが、別の指標からはより詳細な状況が見えてくる。

一つは表2にある標準偏差だ。これを見ると「歴史総合、世界史探究」が2025年度、2026年度ともに3科目中で最も数値が高く、すなわち得点分布の「散らばり」が最も大きいことがわかる。

これに加えて「大学入学共通テスト 段階表示換算表」および「科目別得点の累積分布」を参照するとさらに実態が見えてくる。これはスタナインという、受験者の得点を9段階に区分して評価する方法を用いて、得点の分布をグラフや表にして可視化したものである。大学入試センターは、2025年度よりこの尺度を導入して得点調整を行っている。

2025年度の「歴史総合、世界史探究」は上位得点である9・8段階(上位11%)が他の二つの地歴科目に比べ圧倒的に多い。つまり高得点を最も取りやすかったことを示す。ところが2026年度になると、上位得点者は「歴史総合、日本史探究」がわずかだが最も多く、「歴史総合、世界史探究」は二番目で「地理総合、地理探究」とほぼ変わらない結果になった。そして、次の7・6段階(上位40%)を見ると、2025年度、2026年度どちらも地歴3科目ともほぼ同じような分布になっている。2026年度のテストでは地歴科目について、平均点の上でも、そして得点分布の上でも平準化が進んだことになり、大学入試センターの思惑どおりになったのではないかな。

5. 2026年度「歴史総合」出題内容の分析

①「歴史総合、世界史探究」第1問「歴史総合」

2025年度の「歴史総合」の出題は、世界史的知識を問うものが多かったが、2026年度では日本史・世界史の偏りが解消されるとともに、思考判断を組み入れた問題が8問中4問と半数であった。一方で資料読解のみで解答できる問題も1問あった。また、日本史の知識のみからの出題が2問あり、世界史受験者はやや苦戦したと思われる。このように、2026年度では出題の見直しにより日本史の知識を問う出題が図られ、公平性を考慮して工夫がなされたことが窺える。2026年度の「歴史総合、世界史探究」の平均点が大幅に下がった原因の一端に、第1問の

「歴史総合」部分の出題に世界史受験者が苦戦したことが挙げられよう。

②「歴史総合、日本史探究」第1問「歴史総合」

2025年度の「日本史探究」と組み合わせられた第1問「歴史総合」部分の出題は、1問がほぼ資料の読み取りだけで解ける問題のほかは、世界史の事象の前後関係を問うものや、世界史の知識がなければ解けない問題がほとんどであった。「日本史探究」での受験者はかなり苦戦を強いられたと思う。

しかし、2026年度の第1問は、1問が世界史の知識と図資料の読み取りに時間がかかりやや難しかったものの、世界史の知識のみ必要な3問分や世界史・日本史両方の知識を問う問題も、事象の前後を問うようなものではなく、比較的易しい出題であった。また、日本史の知識のみで解ける問題は1問だけであったが、それも阪神淡路大震災と東日本大震災の年という、一般常識に近い知識があれば読み取れる年表資料でわかりやすい出題であった。総じて2026年度の「日本史探究」との組み合わせになる「歴史総合」部分の出題は、2025年度の出題に比べ易化したと見ている。

6. 共通テストの「歴史総合」対策—筆者の指導例

今後は、「日本と世界のつながり」「世界史のなかの日本」というような、比較や関係性を踏まえた上で俯瞰的に歴史を見つめるという、「歴史総合」の基本理念に基づいた日本史・世界史の複合的な出題が増加してくるものと予想している。

筆者は、授業や補習において生徒たちに以下のように話している。2026年度の「歴史総合」の出題は、日本史の知識のみで解ける問題が出題されたものの、依然として世界史的知識が必要な問題が過半数を占める。「歴史総合、日本史探究」での受験者には、「歴史総合」の教科書にある近現代の世界史的知識について、しっかり復習しておかないと「歴史総合」で大きく得点を失うことになると伝える。

一方で、「歴史総合、世界史探究」の受験者には、日本史の知識を問う出題を取りこぼさぬようにと注意を促す。そして、「歴史総合」の教科書とともに、少なくとも中学校の歴史の知識についてはしっかり身につけておくことを説いている。「歴史総合」にある日本史の内容は、実はほとんどが中学校の歴史をベースとしたものだからだ。

7. 2026年度共通テストの「世界史探究」出題分析

第3問に『ベルサイユのばら』が登場して、オスカルの「バステューユへ!!」というセリフが話題となったが、そのようなトピックに踊らされず、第2～5問の24問・75点分について冷静に分析を進める。

まず、全体を通して世界史の探究活動の会話文になっており、史・資料や地図、絵画を生徒が考察した文から出題されている。センター試験では、設問に直接関係ない写真や史・資料も見られたが、共通テストでそのようなものはない。出題形式に分けて見ると、知識を問う問題が12問、知識と史・資料や地図の読み取りとの組み合わせの問題が11問、読み取りのみで解答できる問題が1問となっていて、出題数の半数が資料読み取りの問題となっている。特に、資料読み取りの問題にはかなりの時間を要するため、時間との勝負になってくる。

時代的・地域的な観点からの分析は、予備校等が公表している講評に詳しいので、本稿では割愛する。以下では、対策のポイントとなるトピックについて述べていくことにする。

地図に関する出題では、第2問の19世紀末～20世紀初頭の東アフリカ(アフリカの角のところ)の地図に関して、独立国のエチオピアの周囲は西欧列強国のどこの植民地となったのかが問われた。(a)が仏領、(b)が伊領、(c)が英領であることを判別しなければならなかった。この出題は、細かく地図を見て位置を把握しておかなければならずやや難問であった。今後も、歴史上で起こった領土分割など、教科書や資料集にある地図の理解において、解像度を上げた学習が必要であることを示唆している。

第4問の文章Aでは、資料1から共和政ローマのころより「インペリウム」が及んでいたことが示唆される。しかし、教科書では元首政の始まりが事実上の帝政ローマの始まりとされている。資料の読み解きから教科書の知識とは違った歴史の見方があることが出題され、受験生は戸惑ったかもしれない。今後もこのような出題には要注意である。

総合的に、2025年度よりも2026年度はやや難化したと見ている。生徒たちには、慌てずしっかり問題文や資料を読むこと、未見の資料や固有名詞に惑わされず既習の知識を拾い上げて、資料の情報と合わせて正答にたどり着くよう指導していきたい。